

「人生は選択の連続。誰が選んでくれたものでもない。自分で歩き出した道だもの。間違いと知ったら、自分で間違いでないようにしなくちゃ。」

【思いもよらず、旅行会社の社員から、秋田の小学校教師に】

大学卒業後、東京の旅行会社に就職したが、家庭の事情もあり帰郷。戻ってきたのはいいけれど、やりたい仕事が見つからない。すでに小学校教員だった兄から、「中・高は倍率高いけど、小学校は募集人数が増えてきたから試験受けてみれば。」と言われ、通信で小学校免許を取り、何度も挑戦。思いもよらず、教師になってしまった。

【思いもよらず、小学校教師から中学校教師に】

小学校に勤務して4年、校長に「今年は大げん異動だな、次に行きたい学校とかあるか。」などと言われ、「小学校楽しいっす。どこでもいいっす。実は専門教科、英語なんすけどね。」「ん？中学校行きたいのか？」「いやいやそんなことじゃなくって～」てなことがあり・・・、異動発表時、「T中だ。小学校だけでなく色々経験してみろ。」と言われ、思いもよらず、中学校教師になってしまった。

【思いもよらず、小規模校のT中に赴任。英語教師は自分一人だけ】

中学校は初体験で、英語に触れるのもほぼ10年ぶり。小さい学校だから、当然英語担当は自分だけ。誰からのアドバイスももらえない。「大学を出ても多くの人がまともに英語を話せない、使えない。もし自分が英語を教える機会があったら、そんな子供にはしたくないなあ」との思いはあるものの、指導方法がわからない。すると最初の指導の拠り所は、悲しいことに、自分が習った頃の文法とドリル中心の授業。

そんなあるとき、校長が言った。

「いいか。今のうちに授業力だけはつける。この先いろんな責任ある仕事を任される。そうなると授業研究どころでなくなるぞ。若いうちは恥をかけるけど、年とってくると恥もかけなくなる。まずは授業だ。」

その一言にビビッときた。

【英語指導への志を抱いてしまった】

それから毎日考え続けた。日本人が日本語を知らず知らずのうちに使えているように、個人差はあるにせよ、どうやったらみんなが自然と英語を使えるようになるのか。どうすれば生きて力がつくのか、そのためにどんな授業をすればいいのか。給食中も、掃除中も、学校への行き帰りも、廊下を歩いている時も、「次の授業はこうする」といったイメージを思い浮かべて、子供がキラキラした目で食いついてくる様子を想像しながら、一人ニヤついている、そんな日々が5年間続いた。

文法など知識の習得を重視する授業から、自分の目指す授業への脱却。その原点・原動力は、「英語は言葉だ。コミュニケーションの道具。使うためにあるんだから、なんとかして子供たちを英語の使える人間にする！」という私の志にあった。

実のところ3年目からは、「これだあ」という手応えを感じ、実際に子供たちの力となって表れてきた。すると自信も芽生え始め、時を同じくして、英語に関する様々な依頼が次々と舞い込むようになった。

～「英語教師になってよかった」と思えた瞬間～

S中勤務となったとき、英語が苦手な子が多い3年生全クラスの授業を受け持つことになった。4月のご対面。英語を学ぶ意気込みがあまり感じられず、なんとなく授業を受けている。ラスト1年しかない3年生、でもきっと自分の世界に引き込めると信じ、「俺の授業はぜったい楽しいぞ、しかも力をつけてやる。信じてついてこい」なんて啖呵を切って授業がスタート。

すると、半年過ぎた頃、あるクラスの英語係が5時間目の5分前に鳴る予鈴の前に職員室にやってきた。

「先生、早く教室行こ。」

「えっ、まだ予鈴も鳴ってないじゃん。」

「単語テストだって休み時間にもう終わらせてるしい。いいから、早く行こってば。」

「ええ～ 仕方ねえな、じゃ行くか。」

どうせまだざわざわしてると思って教室に向かったのだが・・・教室では、全員がびしっと座って授業の始まりを待っていた。

そして私が行くと、「来たあ」と言って拍手。

「まじか。何やってんの、まだ予鈴も鳴ってないのに。」

「いいじゃん。楽しいから。早く授業やろうよ。」と。

なんという幸せな瞬間！

自分のしたことが、誰かのために、世の中のために役立っている。

どんな職業に就いたとしても、働く喜びはその“やりがい”にあるのかもしれない。

子供はあなたのがんばりにきっと応えてくれます。

子供と共に成長し続けられる教師という職業。

永遠に理想を追い求められる教師という職業。

私は好きです。